

彼

芥川龍之介

青空文庫

僕はふと旧友だった彼のことを思い出した。彼の名前などは言
 わずとも好い。彼は叔父おじさんの家を出てから、本郷ほんごうのある印刷
 屋の二階の六畳に間借まがりをしていた。階下の輪転機りんてんきのまわり出
 す度にちようど小蒸汽こじようきの船室のようにながたがた身震みふるいをする二
 階である。まだ一高いちこうの生徒だった僕は寄宿舎の晩飯をすませた
 後のち、度たびこの二階へ遊びに行つた。すると彼は硝子窓ガラスの下に人
 一倍細い頸くびを曲げながら、いつもトランプの運だめしをしていた。
 そのまた彼の頭の上には真鍮しんちゆうの油壺あぶらつぼの吊りランプが一つ、

いつも円まるい影を落していた。……

二

彼は本郷の叔父さんの家から僕と同じ本所ほんじよの第三中学校へ通かよっていた。彼が叔父さんの家にいたのは両親のいなかったためである。両親のいなかったためと云つても、母だけは死んではいなかったらしい。彼は父よりもこの母に、——このどこへか再縁さいえんした母に少年らしい情熱を感じていた。彼は確かある年の秋、僕の顔を見るが早いか、吃どもるように僕に話しかけた。

「僕はこの頃僕の妹が（妹が一人あつたことはぼんやり覚えてい

るんだがね。縁えんづいた先を聞いて来たんだよ。今度の日曜にでも行つて見ないか？」

僕は早速さつそく彼と一しよに亀井戸かめいどに近い場末ばすえの町へ行つた。彼の妹の縁えんづいた先は存ぞん外がい見つけるのに暇ひまどらなかつた。それは床と屋こやの裏になつた棟割むねわり長屋ながやの一軒いっけんだつた。主人は近所こうじようの工場こうじようか何かへ勤つとめに行つた留守るすだつたと見え、造作ぞうさくの悪い家の中にあかこは赤児あかこに乳房ちぶさを含ませた細君、——彼の妹のほかおとなに人かげはなかつた。彼の妹は妹と云つても、彼よりもずっと大人おとなじみていた。のみならず切れの長い目尻めじりのほかはほとんど彼に似ていなかつた。

「その子供は今年ことし生れたの？」

「いいえ、去年。」

「結婚したのも去年だろう？」

「いいえ、一昨年おとしの三月ですよ。」

彼は何かにぶつかるといふように一生懸命に話しかけていた。が、彼の妹は時々赤児をあやしなから、愛想あいその善い応対をするだけだった。僕は番茶しじふの渋のついた五郎八茶碗ごろはちやわんを手にしたまま、勝手口の外を塞ふさいだ煉瓦塀れんがべいの苔こけを眺めていた。同時にまたちぐはぐな彼等の話にある寂しさを感じていた。

「兄にいさんはどんな人？」

「どんな人って……やっぱり本を読むのが好きなんですよ。」

「どんな本を？」

「講談本こうだんぼんや何かですけれども。」

實際その家の窓の下には古机が一つ据えてあつた。古机の上には何冊かの本も、——講談本なども載^のつていたであろう。しかし僕の記憶には生憎^{あいにく}本^のことは残つていない。ただ僕は筆立ての中に孔雀^{くじやく}の羽根が二本ばかり鮮^{あざや}かに挿^さしてあつたのを覚えてゐる。

「じゃまた遊びに来る。兄さんによろしく。」

彼の妹は不相^{あいかわらず}変赤児に乳房を含ませたまま、しとやかに僕等に挨拶^{あいさつ}した。

「さようですか？　では皆さんによろしく。どうもお下駄^{げた}も直しませんで。」

僕等はもう日の暮に近い本所の町を歩いて行つた。彼も始めて

顔を合せた彼の妹の心もちに失望しているのに違いなかった。が、僕等は言い合せたように少しもその気もちを口にしなかつた。彼は、——僕は未だに覚えている。彼はただ道に沿うた建仁寺垣に指を触れながら、こんなことを僕に言っただけだった。

「こうやつてずんずん歩いていると、妙に指が震えるもんだね。まるでエレキでもかかつて来るようだ。」

三

彼は中学を卒業してから、一高の試験を受けることにした。が、生憎落第した。彼がああ印刷屋の二階に間借りをはじめ

たのはそれからである。同時にまたマルクスやエンゲルスの本に熱中しはじめたのもそれからである。僕は勿論社会科学なんに何の知識も持っていないかった。が、資本だの搾取さくしゆだのと云う言葉にある尊敬——と云うよりもある恐怖きようふを感じていた。彼はその恐怖を利用し、度たび僕を論難した。ヴェルレエン、ラムボオ、ヴオドレエル、——それ等の詩人は当時の僕には偶像ぐうぞう以上の偶像だった。が、彼にはハツツシユや鴉片あへんの製造者にほかならなかつた。

僕等の議論は今になって見ると、ほとんど議論にはならないものだった。しかし僕等は本気ほんきになって互に反駁はんぱくを加え合っていた。ただ僕等の友だちの一人、——Kと云う医科の生徒だけはい

つも僕等を冷評れいひようしていた。

「そんな議論にむきになつてゐるよりも僕と一しよに洲崎すさきへでも来いよ。」

Kは僕等を見比べながら、にやにや笑つてこう言つたりした。

僕は勿論内心では洲崎へでも何でも行きゆたかつた。けれども彼は

超ちようぜん

然と（それは実際「超然」と云うほかには形容の出来ない

態度だつた。）ゴルデン・バツトを銜くわえたまま、Kの言葉に取り

合わなかつた。のみならず時々は先手せんてを打つてKの鋒ほこさき先くじを挫き

などした。

「革命とはつまり社会的なメンストラチオンと云うことだね。：

…」

彼は翌年の七月には岡山おかやまの六高ろっこうへ入学した。それからかれこれ半年はんとしばかりは最も彼には幸福だったのであろう。彼は絶えず手紙を書いては彼の近状を報告してよこした。（その手紙はいつも彼の読んだ社会科学の本の名を列記していた。）しかし彼のないことは多少僕にはもの足らたなかつた。僕はKと会う度に必ず彼の噂うわさをした。Kも、——Kは彼に友情よりもほとんど科学的興味に近いある興味を感じていた。

「あいつはどう考えても、永遠に子供でいるやつだね。しかしああ云う美少年の癖に少しもホモ・エロティツシユな気を起させないだろう。あれは一体どう云う訣わけかしら？」

Kは寄宿舎の硝子窓ガラスを後ろうしに真面目まじめにこんなことを尋ねたりし

た、敷島しきしまの煙を一つずつ器用に輪にしては吐はき出しながら。

四

彼は六高へはいつた後のち、一年とたたぬうちに病人となり、叔父おじさんの家へ帰るようになった。病名は確かに腎臟じんぞう結核けつかくだった。僕は時々ビスケットなどを持ち、彼のいる書生部屋へ見舞いに行った。彼はいつも床とこの上に細い膝ひざを抱だいたまま、存外ぞんがい快潤かいかつに話したりした。しかし僕は部屋の隅に置いた便器を眺めずにはいられなかった。それは大抵たいてい硝子ガラスの中にぎらぎらする血けつ尿にょうを透すかしたものだつた。

「こう云う体からだじやもう駄目だめだよ。とうてい牢獄ろうごく生活も出来そうもないしね。」

彼はこう言つて苦笑くしやうするのだつた。

「バクニインなどは写真で見ても、逞たくましい体をしているからなあ。」

しかし彼を慰めるものはまだ全然ない訣わけではなかつた。それは叔父さんの娘に対する、極めて純粋な恋愛だつた。彼は彼の恋愛を僕にも一度も話したことはなかつた。が、ある日の午後、——ある花曇りに曇つた午後、僕は突然彼の口から彼の恋愛を打ち明けられた。突然？——いや、必ずしも突然ではなかつた。僕はあらゆる青年のように彼の従妹いとこを見かけた時から何か彼の恋愛に期

待を持っていたのだった。

「美代ちゃんみよは今学校の連中と小田原おだわらへ行っているんだがね、僕はこの間あいだにげ何気なしに美代ちゃんみよの日記を読んで見たんだ。……」

僕はこの「何気なしに」に多少の冷笑を加えたかった。が、勿も論ろん何も言わずに彼の話の先を待っていた。

「すると電車の中で知り合になった大学生のことが書いてあるんだよ。」

「それで？」

「それで僕は美代ちゃんに忠告しようかと思っっているんだがね。」

……」

僕はどうとう口をすべ込らし、こんな批評ひひょうを加えてしまった。

「それは矛盾むじゆんしているじゃないか？ 君は美代ちゃんを愛しても善いい、美代ちゃんは他人を愛してはならん、——そんな理窟りくつはありはしないよ。ただ君の気もちとしてならば、それはまた別問題だけれども。」

彼は明かに不快ふかいらしかつた。が、僕の言葉には何も反駁はんぱくを加えなかつた。それから、——それから何を話したのであろう？

僕はただ僕自身も不快になつたことを覚えている。それは勿論病人の彼を不快にしたことに対する不快だつた。

「じゃ僕は失敬するよ。」

「ああ、じゃ失敬。」

彼はちよつと頷うなずいた後のち、わざとらしく気軽につけ加えた。

「何か本を貸してくれないか？ 今度君が来る時で善いから。」

「どんな本を？」

「天才の伝記か何かが良い。」

「じゃジャン・クリストフを持って来ようか？」

「ああ、何でも旺盛おうせいな本が良い。」

僕は詮あきらめに近い心を持ち、弥生町やよいちようの寄宿舎へ帰つて来た。窓

硝子ガラスの破れた自習室には生憎あいにく誰も居合せなかつた。僕は薄暗い

電燈したの下に独逸ドイツ文法を復習した。しかしどうも失恋した彼に、

——たとい失恋したにもせよ、とにかく叔父さんの娘のある彼に

羨望せんぼうを感じてならなかつた。

五

彼はかれこれ半年はんとしの後のち、ある海岸へ転地することになった。それは転地とは云うものの、大抵は病院に暮らすものだった。僕は学校の冬休みを利用し、はるばる彼を尋ねて行った。彼の病室は日当りの悪い、透すき間風まかせの通る二階だった。彼はベッドに腰かけたまま、不あいか相わ変らず元す気に笑いなどした。が、文芸や社会科学のことはほとんど一ひと言も話さなかつた。

「僕はあの棕櫚しゆろの木を見る度に妙に同情したくなるんだがね。そら、あの上の葉っぱが動いているだろう。——」

棕櫚しゆろの木はつい硝子窓ガラスの外こずえに木末の葉を吹かせていた。その葉

はまた全体も揺らぎながら、細かに裂けた葉の先々をほとんど神
 經的に震わせていた。それは實際近代的なものの哀れを帯びたもの
 に違いなかった。が、僕はこの病室にたった一人している彼のこ
 とを考え、出来るだけ陽気に返事をした。

「動いているね。何をくよくよ海への棕櫚はさ。……」

「それから？」

「それでもうおしまいだよ。」

「何だつまらない。」

僕はこう云う対話の中にだんだん息苦しきを感じ出した。

「ジャン・クリストフは読んだかい？」

「ああ、少し読んだけれども、……」

「読みつづける気にはならなかつたの？」

「どうもあれは旺盛おうせいすぎてね。」

僕はもう一度一生懸命に沈み勝ちな話を引き戻した。

「この間あいだKが見舞いに来たつてね。」

「ああ、日帰りやって来たよ。生体解剖せいたいかいぼうの話や何かして行つたつて。」

「不愉快なやつだね。」

「どうして？」

「どうしてつてこともないけれども。……」

僕等は夕飯ゆうはんをすませた後のち、ちようど風の落ちたのを幸い、海

岸へ散歩に出かけることにした。太陽はとうに沈んでいた。しか

しまだあたりは明るかった。僕等は低い松の生えた砂丘の斜面に腰をおろし、海雀の二三羽飛んでいるのを見ながら、いろいろのことを話し合った。

「この砂はこんなに冷たいだろう。けれどもずっと手を入れて見給え。」

僕は彼の言葉の通り、弘法麦の枯れ枯れになった砂の中へ片手を差しこんで見た。するとそこには太陽の熱がまだかすかに残っていた。

「うん、ちよつと気味が悪いね。夜になつてもやつぱり温いかしら。」

「何、すぐに冷たくなつてしまう。」

僕はなぜかはつきりとこう云う対話を覚えてゐる。それから僕等の半町ほど向うに黒ぐると和なごんでいた太平洋も。……

六

彼の死んだ知らせを聞いたのはちようど翌よくとし年の旧正月だった。何でも後のちに聞いた話によれば病院の医者や看護婦たちは旧正月を祝いわうために夜更よふけまで歌留多会かるたをつづけていた。彼はその騒さわぎに眠られないのを怒いかり、ベッドの上に横たわったまま、おお声に彼等を叱しかりつけた、と同時に大喀血だいかっけつをし、すぐに死んだとか云うことだった。僕は黒い梓わくのついた一枚の葉書を眺めた時、悲しさ

よりもむしろはかなさを感じた。

「なおまた故人の所持したる書籍は遺骸と共に焼き棄て候えども、
 万一貴下より御貸与ごたいよの書籍もその中うちにまじり居り候節せつは不あしからず悪あしからず
 御赦おゆるし下され度候たまわらう。」

これはその葉書の隅に肉筆で書いてある文句だった。僕はこう
 云う文句を読み、何冊かの本が焰ほのおになつて立ち昇る有様を想像し
 た。勿論それ等の本の中にはいつか僕が彼に貸したジアン・クリ
 ストフの第一巻もまじつてゐるのに違ひなかつた。この事實は当
 時の感傷的な僕には妙しやうに象しやうちやう徴しやうちやうらしい氣のするものだった。

それから五六日たつた後のち、僕は偶然落ち合つたKと彼のことを
 話し合つた。Kは不あいかわらず相あいかわらず変冷然としていたのみならず、巻煙草を

銜くわえたまま、こんなことを僕に尋ねたりした。

「Xは女を知っていたかしら？」

「さあ、どうだか……」

Kは僕を疑うようにじつと僕の顔を眺めていた。

「まあ、それはどうでも好いい。……しかしXが死んで見ると、何か君は勝利者らしい心もちも起つて来はしないか？」

僕はちよつとしゅんじゅん逡巡しゅんした。するとKは打ち切るように彼自身の問に返事をした。

「少くとも僕はそんな気がするね。」

僕はそれ以来Kに会うことに多少の不安を感じるようになった。

(大正十五年十一月十三日)

青空文庫情報

底本：「芥川龍之介全集6」ちくま文庫、筑摩書房

1987（昭和62）年3月24日第1刷発行

1993（平成5）年2月25日第6刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房

1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月

入力：j.utiyama

校正：もりみつじゅんじ

1999年3月1日公開

2004年3月10日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.w.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

彼

芥川龍之介

2020年 7月13日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>